



フランスの公立高校における日本語教育の実情と実践報告 -CEFRと国民教育省のプログラムに準拠した外国語教育-

寺田真紀 (フランス国民教育省日本語アグレジェ教諭
元ジュール・ゲード国際高校日本語科主任)

Maki Terada (professeur agrégée de japonais, ancienne coordinatrice de discipline au lycée international Jules
Guesde à Montpellier)

はじめに

日本におけるフランス人観光客の多さには帰国する度に驚かされますが、今年にいたってはフランス人が外国人観光客としてコミカルに登場するテレビのCMまで放映されており、フランス人観光客のプレゼンスの大きさが見てとれます。フランス人の来日者数は年々増加していますが⁽¹⁾、日本文化へ強い関心を寄せているのは大人だけではないようで、中等教育の日本語教育現場でも日本語、そして日本文化への興味の高まりを肌で感じます。今回は私が2008年度より2016年度までアグレジェ教諭⁽²⁾として日本語科主任を務めていたジュール・ゲード国際高校における日本語教育の実情を中心にご報告いたします。

1. ジュール・ゲード国際高校における日本語教育

南仏の地中海沿岸の街、モンペリエにあるジュール・ゲード国際高校に日本語クラスが開講されてから今年で10年になります。当時、周辺地域はもちろん、モンペリエ大学区内でも唯一日本語を学べる公立高校であったことに加え、高校の方針として外国語教育に大いに力を入れていることもあり、学区内はもとより学区外からも寮生として生徒が通う程の人気となりました。2007年度にまず第3外国語としての日本語のクラスが開講されました。第3外国語としての日本語の履修者数の増加ゆえに、その後、第2外国語としての日本語も開設され、2007年にはわずか17人だった日本語学習者数は、2016年度には160人を超え、フランス人中高生の日本文化や日本語に対する強い関心を肌で感じました。フランスでは日本語を履修できない高校もあれば、日本語を第1外国語、第2外国語、さらには第3外国語として履修できる高校もありますが、ジュール・ゲード国際高校では、第2または第3外国語として日本語を履修できます。第2外国語として履修する場合、自動的にセクション・オリエンタルを選択することになっています。セクション・オリエンタルの特徴は、週1時間の言語力強化クラスと、同じく週1時間のDiscipline non linguistique (非言語教科。以下、DNL)と呼ばれるクラスにあります。DNLでは、生物や体育、経済、歴史・地理などの外国語以外の科目担当教師が、その科目

を外国語で教えます。ジュール・ゲード国際高校の日本語科のDNLでは、日本に関する歴史・地理を日本語を使って学習します。

2. CEFRに基づく中等教育機関における外国語教育

フランスで正規の教員として中等教育機関で勤務するには、アグレガシオン (agrégation) やカペス (CAPES) といった教員選抜試験⁽³⁾に合格する必要があります。合格後の一年間は研修期間とされ、教育大学院 (ESPE / école supérieure du professorat et de l'éducation) において、CEFRおよび国民教育省の外国語プログラムに沿った学習指導案の作成の仕方などを学びます。教員試験でCEFRに関する知識、またその実践に関して問われることから推測できるように、フランス中等教育機関で外国語教育に携わる教師は、CEFRの理念に沿って授業を展開しなくてはなりません。また正規教員になると数年毎に行われる、視学官による評価を兼ねたアンスペクシオンと呼ばれる授業視察の際も、CEFRの原則に基づいて授業が展開されているか、取り分け、行動中心アプローチを組み入れて学習指導案を作成しているか、5つの言語アクティビティ (読むこと、書くこと、聞くこと、一人で話すこと、対話すること) を取り入れながら⁽³⁾⁽⁴⁾授業を進めているかが評価対象になります。研修及びアンスペクシオンでは、授業中はなるべく生徒が話す時間を多くするように指導され、教師は一方的に教えるのではなく、生徒同士が日本語で話すアクティビティを積極的に取り入れながら授業を進めるよう指示されます。授業中に外国語で話す練習を中学校から行っているため、生徒達は比較的抵抗なく日本語で話す練習に取り組みます。このような形態の授業で培う言語面及び社会文化面に関するコミュニケーション能力は、第2外国語としての日本語、第3外国語としての日本語共に、バカロレアにおける発表とそれに続く質疑応答からなる口頭試験で最終的に評価されることとなります。

フランス国民教育省が定める中等教育の第4課程の初年度⁽⁵⁾、つまり日本における中学1年生から第2外国語の学習が始まり⁽⁶⁾、その言語は第2外国語として引き続き高校でも履修されます。普通科の高校の場合、第2外国語は必修科目で、高校3年生次に行われるバカロレア

(中等教育の修了資格証明試験) 受験の際には、CEFR の B1 相当の筆記及び口頭試験が課せられます⁽⁷⁾⁽⁹⁾。一方、第3外国語は必修科目ではなく、希望者のみ高校1年生から履修が可能です。バカロレアでは口頭試験のみの受験となり、生徒は CEFR の A2 を目指します⁽⁸⁾⁽⁹⁾。

3. 国民教育省の外国語プログラムの実践例(1) -CEFRの理念の文脈化としての外国語プログラム-

中等教育において外国語教師が教鞭をとる際に CEFR と同様に必要なのは、国民教育省が定める学習指導要領 (programme) に関する知識です。それによると、高校1年生の外国語授業の共通テーマは「共存のアート」であり、この大テーマ中に3つのテーマ「記憶：継承と断絶」、「帰属感情：単一と団結」、「未来のヴィジョン：創造と適応」があります。教師はそれらのテーマの一つに沿って学習指導案を作ります⁽¹⁰⁾。バカロレアの準備に入る高校2年と3年、つまり最終課程の外国語学習における共通テーマは、「創生の行為と変化する世界」です。その大テーマの中に「伝承」、「交流」、「権力」、「進歩」の4つの小テーマがあります。

どの外国語でも担当教師はこれらのテーマ内で、生徒の年齢や興味の対象、クラスの雰囲気や全体のレベルなどに合わせて、学習項目の難易度を調整し、各自で内容を決めた上、学習指導案を準備します。学習指導案には言語面の目標、文化面の目標、評価方法を明確にするように指導される他、授業で行うアクティビティが、5つの言語アクティビティの中のどれに対応しているかも明記します。

例えば、高校1年生の第2外国語としての日本語クラス (ジュール・ゲード高校では、学年末に A2 レベルに達するのが目標のクラス) で「記憶：継承と断絶」をテーマとして「日本における女性」に関して数回に渡る授業を展開したことありました。その授業の一つでは、クラ

スでフランスにおける家族の1日を振り返り、既習事項を確認した後、生徒たちはグループになり、教師が用意した日本で数十年前よりテレビ放映されているアニメの動画 (授業で使う動画や文章は *authentique*, つまり教材として作られたものではないリソースを使うように指導されます) を視聴し、日仏の家族、特に母親の役割の違いについて発見しました。ここではあえて、登場人物の母親が専業主婦のものを選びました。それをグループごとに発表していきますが、その際に教師は、グループの全ての生徒が話す機会を与えられていること、書いたものをただ読む作業にならないこと、また発表を聞いている生徒にもアクティビティを与えることに注意し、そして明確なガイドラインを作り生徒主体のアクティビティが円滑に進むようにします。専業主婦ではない日本人の母親が登場する話を見つけることを宿題として出し、次の授業では、自分たちが持ち寄った情報を元にまた発表形式で授業を進めます。それらの発表は専業主婦と兼業主婦の意見交換会をするロールプレイ形式の授業へ展開します。最終的には保育園の待機児童問題に関する文章を読み、小作文を書く授業に発展しました。これらのアクティビティを通して、生徒が5つの言語アクティビティ全てを行えるようにします。

このように生徒は CEFR の理念と国民教育省のプログラムに準拠した授業を受け、それは高校3年生の学年末に行われるバカロレア (中等教育の修了資格証明試験) で最終的に評価されます。バカロレアにおいては最終課程の4つのテーマ (伝承、交流、権力、進歩) から問題が出題されます⁽¹¹⁾。例えば、バカロレアの筆記問題には4つのテーマの1つが明記されていて、読解問題ではそのテーマに関する文章を読みます。また口頭試験では、生徒は授業で扱われたテーマのリストを試験官に提出し、試験官はそのテーマから1つを選択します。そして生徒はそのテーマについて発表を行います。

表1 バカロレアのテーマ

課程	共通テーマ	小テーマ
高校1年生 (進路決定学年)	共存のアート	記憶：継承と断絶
		帰属感情：単一と団結
		未来のヴィジョン：創造と適応
高校2・3年生 (最終過程)	創生の行為と変化する世界	伝承
		交流
		権力
		進歩



4. 国民教育省の外国語プログラムの実践例(2) -学習している外国語に直接触れる-

教育方法はこのように国民教育省が詳細にわたり定め、官報で公表し、フランス全土で統一されます。2010年4月29日付特別官報4号や同年9月30日付特別官報9号では、生徒が勉強している外国語に直接触れる機会を持つことが勧められています。私が教鞭を取ったジュール・ゲード国際高校でも、この観点から日本語履修者が日本へ行く機会を設けるべく取り組みました。

その実践の一例として私が行ったプロジェクトに、ラングドック・ルシヨン州(現オクシタニ州)政府より助成金を受けての日本への語学研修旅行や、日本の2つの高校との姉妹校関係の締結が挙げられます。また、それ以前からも日仏高等学校ネットワーク COLIBRI(コリブリ)を通しての交換留学を始めておりました。

コリブリは2002年に在日フランス大使館からの発案に基づき数年の準備期間を経て実現した組織で、フランスで日本語を教えている高校と、日本でフランス語を教えている高校が加盟しているネットワークです。コリブリ憲章に学校長が署名することにより、ネットワーク加盟校間での交換留学プログラムに生徒が参加できるようになります。ジュール・ゲード国際高校も2009年に加盟校となりました。コリブリ留学の最大の特徴は、参加生徒が現地の高校生として学校生活、そして家庭生活を送ることができるということです。コリブリ日本は在日フランス大使館から、コリブリフランスはフランス国民教育省と独立行政法人国際交流基金から助成金を受けています。各校の担当教員も運営に携わる役員も皆、ボランティアでこの留学制度のサポートをしていて、私も2015年よりコリブリフランスの副会長として微力ながら活動に携わっています。コリブリの留学は3週間の短期プログラムと9ヶ月の長期プログラムがありますが、近年行われているのは主に短期プログラムです。2018年4月現在、フランスにおけるコリブリ加盟校は26校で、日本は29校、そしてニューカレドニアに5校の加盟校があります。毎年、フランス本土からは40人前後の高校生がコリブリを通して訪日し、ジュール・ゲード国際高校からも日本語科の生徒が2~4人程度、コリブリの交換留学に参加しています。フランスからの参加生徒は、まず秋に3週間、日本のホストブラザー/シスター宅にホームステイし、ホストブラザー/シスターと共に高校生活を送ります。そして春にはそのホストブラザー/シスターが渡仏し、同様にホームステイをし、そしてフランス人生徒と高校生活を送ります。現地での対応は全て各校のコリブリ担当教員が行い、授業料は免除、また食費はホストファミリ

ーが負担し、自己負担となるのは渡航費と自分のお小遣いのみです。



コリブリの日本人高校生と日本語科生徒の交流会

5. 生徒の学習動機

ジュール・ゲード国際高校の第2外国語の日本語クラスに入る為には中学時代の成績と志望動機書からなる書類審査があり、志望動機書には日本に対する熱意や日本語学習を志望する動機が綴られています。多くの生徒が漫画、アニメ等で小さい頃に日本文化に触れたことをきっかけにして日本に興味を持ち、日本に行くのが自分の夢だということを述べています。新学年が始まる9月に高校1年生に自己紹介をさせると、漫画、アニメ、ゲームなどで日本を知り、今ではコスプレや日本のポップミュージック、そしてビデオゲームなどに興味を持っているという生徒が大部分を占めます。

毎年冬に行われる中学3年生向けの学校説明会では、参加する保護者はもちろん、生徒たちも非常に熱心に日本語科についての説明に耳を傾けてくれ、コリブリの留学や語学研修旅行においての写真を見せると、明らかに生徒の目の輝きの度合いが増します。学校説明会で日本語を学ぶ意義や理由を問う保護者には、世界的に展開している日本の企業が世界の経済をリードしていること、中国語や韓国語との類似性、または中国の経済力を鑑みてアジア圏に共通する思考を理解する必要性があるといった説明をします。一方で、生徒は単純に日本に興味を持ち、日本語を使えるようになりたいという内発的モチベーションを持って入学後も積極的に日本語学習に取り組んでいます。

高校3年間を通して、毎年行われる保護者面談では「日本語が学べ子供が非常に喜んでいる」「他の教科は勉強せずに日本語ばかり勉強している」などの声が聞かれることが少なくなき、実際、学期ごとに行われるコンセイユ・ドゥ・クラス(クラスごとに、校長、担任教師、生活指導の教員を始めそのクラスの生徒を受け持つ全教科の教員、及びクラスの生徒代表、クラスの保護者代表が集まり、生徒一人一人の成



績、授業態度、素行などについて話し合う会議)では、日本語の授業では頻繁に挙手し、授業中のみならず家でも積極的に日本語の勉強に励んでいる生徒が、他の教科ではまるで反対の授業態度を示しているということを同僚の発言から知り、驚くこともよくありました。

6. フランスの中等教育で日本語を教える意義

第3外国語としての日本語、つまり必修ではない科目として日本語を学ぶ生徒が多いフランスの中等教育機関では、ジュール・ゲード国際高校のように、やる気溢れる生徒たちが集まるケースが多いと考えられます。年齢的に反抗期も重なっているフランス人高校生は、日本文化、特にサブカルチャーを共通点として仲間たちと自らの世界を形成し、居場所を見つけることで日本語学習に対する内発的モチベーションを高めているように見受けられます。そのような中で、マンガやアニメで見た「夢の国日本」に対する肯定的な感情を保持しながら現実の日本を知ってもらうこと、つまり、労働環境や男女差など、日本に住めば対峙せざるをえない様々な問題を紹介すること、そして、フランスと対比しつつ、問題が起きる理由や解決策を考察するきっかけを作ること、日本語教師としての大きな仕事の一つではないかと考えています⁽¹²⁾。フランスの学校教育の大きな柱である批判的精神を養いつつも、異言語、異文化を発見

する外国語教育により、他者に対して寛容な精神が培われ、ひいては複眼的思考が可能になるのではないのでしょうか。そして、それは欧州評議会が掲げる複言語主義につながります。このように思考や文化、またそれを表現する言語構造が自国、つまり西洋の言語とは対極に位置する日本語を、高校生という多感な時期に学ぶことによって、人間的に開かれた精神が涵養されることこそ、まさにフランスの中等教育機関において日本語を教える意義ではないかと感じます。私の授業を受けることで、生徒たちが言語や文化の多様性への相互理解をさらに深め、相対的な視野を持った親日家のフランス人になってくれることを願っています。



モンペリエ日本語補習校保護者と共同で行った日本食の調理実習及び試食会

注

(1) 出典 <https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/>

(2) フランス国民教育省は *agrégation* (アグレガシオン/中等教育上級教員資格) と *CAPES*(カペス/中等教育教員資格) と呼ばれる2種類の教員資格試験を設けていて、正規の教員になるにはこのどちらかの選抜試験に合格しなければなりません。全教科のアグレガシオン及びカペスで筆記と口頭での選抜試験があり、また教科により募集人数及び合格者の人数は様々です。2015年度の日本語・日本文化アグレガシオン受験申込者数は12人、筆記試験合格者数は3人、口頭試験合格者数は2人でした*。

このアグレガシオン合格者はアグレジェ教諭と呼ばれ、中等教育機関だけでなく大学でPRAG(教育職)として教鞭をとることができます。

* <<http://www.devenirenseignant.gouv.fr/cid98772/les-donnees-statistiques-des-concours-de-l-agregation-de-la-session-2015.html>>

(3) 2010年9月30日付フランス国民教育省特別官報9号

(4) 2010年4月29日付フランス国民教育省特別官報4号

(5) フランス国民教育省では幼稚園の年少組、年中組、年長組を「第1課程(初期学習課程)」, 小学校1~3年を「第2課程(基礎学習課程)」, 小学校4~6年を第3課程(強化学習課程), 中学校1~3年を「第4課程(深化学習課程)」, 高校1年生を「進路決定学年」, 高校2~3年を「最終課程」と定めています。<

<http://eduscol.education.fr/cid101628/cycles-et-horaires.html>> 及び <<http://eduscol.education.fr/pid23167/lycee-d-enseignement-general-et-technologique.html>>

(6) 2015年11月26日付フランス国民教育省特別官報11号

(7) 2014年1月23日付フランス国民教育省官報4号

(8) 2013年11月23日付フランス国民教育省官報43号

(9) 2010年9月30日付フランス国民教育省特別官報9号

(10) 2010年4月29日付フランス国民教育省特別官報4号

(11) 2010年9月30日付フランス国民教育省特別官報9号

(12) 日本のサブカルチャーへの興味関心がもし一過性のものだとすれば、日本語学習の意義をそこにのみ見出すのは危険があります。しかし、現状では日本のサブカルチャーが日本語を学習する若者の興味を強く引いているだけではなく、精神的な拠り所にもなっているのも確かですので、両者のバランスを見極めながら教材やリソースを吟味することが必要となります。